

## 〈沈黙の声〉に耳を澄ます - 『アラビアン・ナイト』と中世中東世界 -

杉田 英明

一般に中東イスラム世界では、「神の言葉」である『コーラン』のアラビア語が啓示言語として特別の地位を占め、書道や朗誦が芸術上の一範疇を形成した。そこでは文字による伝達と並んで、暗記や口承が重んぜられたため、他文化圏に比べても音声がか文化的に大きな役割を演じてきたことは疑いない。だが、そうした明瞭な音声としての言葉以外にも、客観的な説明がつけにくく、特定の人間にのみ聴き取ることのできる声なき声、沈黙の言葉という概念が存在した。『アラビアン・ナイト』の用例を出発点にしてこの概念を探り、さらに中国や日本での対応概念についても考えてみよう。

### 1. ハーティフ

「ハーティフ」*ḥatīf* とは元来、「叫び」に関連するアラビア語の三語根〈h-t-f〉から形成された能動分詞男性単数形で「甲高い声で叫ぶ者」を意味し、そこから転じて「姿は見えず声だけが聞こえる存在」を指すようになった。これは古代以来、地中海・中東世界で広く信じられてきた神秘的な存在—例えばヘブライ語の「声の娘」*bat qōl*<sup>1)</sup> やギリシア語の「声」*phōnē*<sup>2)</sup> —に対応する概念であろう。アラブでは、予言や神託、警告・忠告・真理など冥界の情報を人間に伝える天使と見做される一方で、沙漠に住むジン（魔神）やグール（食人鬼）と同一視されることもあり、その正体に関して早くからさまざまな議論が行なわれた。例えばジャーヒズ（868/9年歿）の『動物の書』や、マスウーディー（956年歿）の『黄金の牧場』など<sup>3)</sup> にも、ハーティフを扱った章がある。のちにはペルシア語やオスマン語にも同じ概念が移入された。現代でもこの言葉は、電話を表わすアラビア語として一般に用いられる。

『アラビアン・ナイト』「荷担ぎやと三人の娘の物語」中「第三話」（第15夜）のなかには、難破した主人公が夢のなかで不思議な声を聞き、その命令に従って銅製の騎士を射落とす場面がある。

はっと思つて眠りからさめたみどもは、がばと身を起こし、不思議な声 *ḥatīf* が告げたごとくにことを行ない、騎士を射ると、海中に落ちていきました。<sup>4)</sup>

こうした声は、のちには預言者やその教友、聖者らにまつわる逸話のなかで頻出するに至る。一例として、イスラム神秘主義の聖者として知られるイブラーヒーム・イブン・アドハム（777/82年頃歿）の伝記を取り上げてみよう。この聖者はバルフの王族であったが、神の声を聞いて悟り、一切を捨てて荒野で流浪の生活に入ったという、仏陀の生涯との類似が注目される人物である。有名な神学者で自らも神秘家であったクシャイリー（986-1072年）の『論攷』では、イブラーヒームが神の声に目覚める一節が次のように記されている。

彼は王族の一人であった。ある日狩猟に出かけ、狐や兎を追っていると不思議な声 *ḥatīf* が「何とイブラーヒームよ、汝はこのことのために創られたのか、汝はこうせよと命ぜられたのか」と叫んだ。それからまた、鞍の突起の部分から声が響いて「いやいや、汝はこんなことのために創られたのではあるまい、このようなことをせよと命じられたのもあるまい」と語った。彼は馬を降りると、たまたま父

王の羊飼いに会ったので、その羊毛の粗衣を受け取って自分の身に纏い、自分の馬と持ち物一切を羊飼いに与えて沙漠に入った。<sup>5)</sup>

—同じ聖者の死に関して、ペルシアの神秘主義詩人アッタール（1220年歿）は、ペルシア語の伝記集『聖者列伝』で、「イブラーヒームの魂に死が訪れると、不思議な声 *hātef* が響いた」<sup>6)</sup>とも述べている。このような、客観的には説明不可能な声は、のちには「冥界からの神秘の声」*hātef-e gheyb* という表現を与えられる<sup>7)</sup>一方、時代が下ると「魂の神秘の声」*hātef-e jān* つまり良心とも呼ばれるようになる。元来、アラビア語ではハーティフはジンの一種と見做されることが多かったため、「ジン族のハーティフ」*hātif jānn* という言い回しがあったが、それがペルシア語世界に入ると、「ジャーン」がジンと同時に「魂」をも意味するため、「魂のハーティフ」という意味に転用されたのであろう。これは、神秘的概念に対する一種の合理的解釈とすることができる。

## 2. リサーン・アル= ハール

ハーティフがアラブの古い信仰に由来する概念であるのに対し、リサーン・アル= ハール *lisān al-ḥāl* は元来、神秘主義の術語であった。「ハール」は通常のアラビア語では「状況」を意味する単語であるが、神秘主義の文脈ではとくに神と人間とが合一した陶醉・恍惚の境地を指す。その境地に達した者は、自己の表情や動作、周囲の状況に言葉以上に雄弁にものを語らせることができると同時に、他者や事物・動植物の発するその種の言葉をも理解できると考えられた。そのような、神秘的恍惚境のなかで発せられ聞き分けられる、万物の発する声ならざる声、言葉を超えた言葉を「状況の舌」つまり「リサーン・アル= ハール」と呼ぶ。英語では「沈黙の雄弁」*mute eloquence*、日本語では「神秘の言葉」と訳されることも多い。

この概念の起源は『コーラン』に求められる。例えば、

七つの天と大地と、そこにある一切のものは神を讃える。神の栄光を讃えないものは何もない。ただお前たちには、それらの讃美がわからないだけである。

(第17章44節)

天と地のあいだにある一切のものが、翼を張って飛ぶ鳥まで神を讃美するのが、汝にはわからないのか。いずれも礼拝と讃美を知っている。

(第24章41節)

とあるように、自然界の万物は、人間の聴覚には捉えられぬ方法で神を讃美していると考えられた。神学者ザマフシャリー（1075-1144年）は、すでにこの聖句への注釈において「神秘の言葉」*lisān al-ḥāl* という概念を援用している。<sup>8)</sup> またそれより少し前、神秘主義に関するペルシア語最古の体系的文献として知られるフジュヴィーリー（1072年歿）の『神秘の顕現』には、次のようなアラビア語の詩が収められている。

神秘の言葉はわが舌よりも雄弁にして、

わが沈黙こそ問いへの通訳なり。

*lisānu-l-ḥālī afṣaḥu min lisāni*

以後、「神秘の言葉は弁舌の言葉より雄弁なり」lisān al-ḥāl afṣaḥ [antaq/abyan] min lisān al-maqāl という諺が、神秘主義の文脈を離れて一般に以心伝心、ないしは不言実行の重要性を説くために用いられるようになってゆく。ペルシア語でも同じ概念は「ザバーネ・ハール」zabān-e ḥāl という言葉で表現された。

『アラビアン・ナイト』の原形が整えられた14世紀以降、その説話中にこうした一般的な「神秘の言葉」の概念が頻出するのは当然のことであろう。例えば前出の「荷担ぎやと三人の娘の物語」の「第二の遊行僧の話」では、魔鬼に囚われた男女のあいだで、声に出さぬまま「神秘の言葉」によって詩のやりとりが行なわれる。<sup>10)</sup> これは「以心伝心」の意味で用いられた好例である。他方、同じ物語の「門番の女の話」では、婚礼の場に招待された主人公の女性に対し、家の女主人が喜んで次のような詩を詠む場面が記録されている。

この家がどなたが来たかを知ったなら、喜びましょう  
気もうきうきとおみあしの跡に口づけするでしょう  
声なき言葉で長ながとご挨拶など申しましょう  
これはこれはようおいで、貴く気高いお客さま！

law ta‘lamu-d-dāru man zāra-hā fariḥat

wa-stabsharat thumma bāsāt mawḍī‘a-l-qadamī

wa a‘lanat bi-lisāni-l-ḥāli qā’ilatan

ahlan wa-sahlan bi-ahli-l-jūdi wal-l-karamī <sup>11)</sup>

館という事物が人間に対し、感情や動作を以て反応する。そのさいの挨拶の言葉は「声なき言葉」lisān al-ḥāl すなわち「神秘の言葉」によるというのである。これは、現代の概念を用いれば一種の擬人化と言えるだろう。

同じように事物が声を立てる例としては、「ヌール・アッ=ディーンと帯編娘マルヤムの物語」のなかで、主人公の娘が木片からウード（琵琶）を組み立て、演奏を始める場面を挙げることができる。娘は袋のなかから三十二個の木片を取り出して、雄は雌に、雌は雄に嵌め込み、指先で弦を弾いて楽の音を奏でる。

するとウードは嘆きの声を発しつつ鳴り響き、故郷を恋こがれるのでした。そして、かつて吸い上げた水や生まれ育った土地、自分を切り倒した樵夫や磨きをかけた職人、取り引きした商人、運んだ船などを思い起こしたのでございます。叫びを上げ、過去を弔い、嘆き悲しむそのさまは、まるで彼女が発したくさぐさの問いにウードが答えて、神秘の言葉 lisān al-ḥāl でもって詩句を詠んだかのように思われました。<sup>12)</sup>

こうしてウードは、「かつて我は、小夜鳴鶯が宿る枝なりき」で始まる一人称の歌を歌う。「ウード」には楽器の琵琶と樹木の枝の両義があるので、その双方を掛けて自らの過去の思い出を語り出すのである。楽器の音色が人間の理解できる言葉へと変換される。これもまた「神秘の言葉」の効用と言えよう。この場面は、ペルシアの神秘主義詩人ルーミー（1207-73年）の『精神的マスナヴィー』冒頭、葦笛の歌として知られる有

名な一節<sup>13)</sup>を思い起こさせずにはおかない。

なお「神秘の言葉」は、人間に対して詩が靈感のように冥界から授けられる場合にも用いられる。この用例は、「イスラエルの子孫たちの法官と信心深いその妻との話」や「イスラエルの子らのうちある信心深い男の話」「ハッジャー・ジュ・イブン・ユースフと信心深い男との話」など、『アラビアン・ナイト』の中間部分に集められた一連の敬神家たちの篤行談に頻出する。これらでは「天に声があつて、こう申しました」*qad anshada lisān al-hāl*<sup>14)</sup> という表現によって、詩があたかも天からの不思議な声のごとくに響き渡るという設定になっている。つまり、前の「ハーティフ」ときわめて近い概念として用いられているのが特徴的である。

### 3. 極東世界との相関

こうした声ならざる声という概念は、極東世界の私たちにも大きな違和感なく受け取られることだろう。それは古来、中国文化圏に類似の概念が存在していたからにはほかならない。例えば『莊子』には、「道」の世界に身を置く王徳の人が、常識的な視覚の届かない暗闇のなかで物を視、聴覚の届かぬ静寂のなかで自然の声を聞くという有名な一節―「冥冥に視、無聲に聴く。冥冥の中、獨り暁を見、無聲の中、獨り和を聴く」(天地篇)―がある。ある精神的位階に達した人物が声なき声を聴くとは、イスラム神秘主義の「神秘の言葉」と実によく対応する概念である。

また、同じ『莊子』の斉物論篇では、楚の昭王の弟である南郭子綦が恍惚として我を忘れた状態にいるとき、弟子の顔成子游が声をかける。それに対して師は「今、吾、我を喪へり。汝之を知るか。汝人籟を聴きて未だ地籟を聞かず、汝地籟を聞きて未だ天籟を聞かざるかな」と答える。つまり、通常の間には人籟(楽器の音)や地籟(大地の発する響き)は聞こえても、それらを生じさせている根源、音も形もない、無に等しい宇宙の風を捉えることはできない。万籟を万籟としてあるがままに受け入れる、万物と一体になった忘我の境地に至って初めて、人は天籟を聞くことが可能になるというのである。これもまた神秘主義の考え方に通底しよう。

興味深いのは、『アラビアン・ナイト』の訳者・前嶋信次氏が「神秘の言葉」の訳語にしばしば「天籟」を宛てておられる点であろう。例えば、天から靈感のように詩が聞こえてくる場面は次のように訳されている。

これはまさに天籟とでもいうべき声があつて、つぎのような言葉を囁いたとでも申しましようか (*lisān al-hāl yaqūlu hādhā al-maqāl*)。

天籟のごとき声はつぎのように歌っております (*lisān al-hāl yaqūlu*)。<sup>15)</sup>

これは、中国の古典とアラビア語との双方の素養を生かした良訳と評することができるだろう。

さらに視野を拓ければ、近代以降の日本の詩歌のなかで「沈黙<sup>しじま</sup>の声音」(北原白秋)や「桜ちる音」(山川登美子)、あるいは蝶の声(吉野鈺二)といった概念が頻出する<sup>16)</sup>のも、声なきものの声を聞くという古来の伝統に即した現象であろう。そのような伝統の共通性を踏まえると、中東世界もまた一層身近に感じられるのではないだろうか。

## 注

- 1) Ludwig Blau, “Bat kol,” in: *The Jewish Encyclopaedia*, 12vols., Vol.2, New York: KTAV Publications, n.d.[1901].
- 2) プルタルコスの『倫理論集』「神託の類廃」が伝える有名な逸話によると、ティベリウス帝の時代、エジプト人の船乗りタムースがギリシアからイタリアへ航海中、海上で三度自分に呼びかける声 (phōnē) を聞き、「偉大なるパンは死せり」と人々に伝えるよう命じられた。Plutarchus, *Moralia*, 419 C-E.
- 3) al-Jāhīz, *Kitāb al-Ḥayawān*, 7vols., ed. ‘Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, Beirut: al-Majma‘ al-‘Ilmī al-‘Arabī al-Islāmī, 1969, Vol.6, pp.202-03; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, 4vols., ed. Yūsuf As‘ad Dāghir, Beirut: Dār al-Andalus, 1984, Vol.2, pp.139-40.
- 4) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第1巻、平凡社東洋文庫、1966年、p.196 (表記を一部改変)。 *Alf Layla wa Layla*, 2vols., Būlāq, 1252 AH., Vol.1, p.42.
- 5) al-Qushayrī, *al-Risāla al-Qushayrīya*, Cairo: al-Maṭba‘a al-Saniya al-Khadiwiya bi-Būlāq, 1284 AH., p.10.
- 6) ‘Aṭṭār, *Tadhkira al-Awliya*, 2vols., ed. R.A.Nicholson, Leiden: E.J.Brill, 1905-07, Vol.1, p.106. 邦訳：藤井守男『イスラーム神秘主義聖者列伝』国書刊行会、1998年、p.121.
- 7) 例えばペルシア詩人ハーフィズ (1389年歿) の抒情詩には、この「冥界からの神秘の声」が何度か登場する。黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』平凡社東洋文庫、1976年、p.69 (no.90), p.138 (no.189)。 *Divān-e Ḥāfiz*, ed. Parvīz N.Khānlari, Tehran: Khārazmi, 1981, nos.91,184.
- 8) al-Zamakhsharī, *al-Kashshāf*, 3vols., Cairo: Maktaba Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalabī, 1948, Vol.2, p.770.
- 9) al-Hujvirī, *Kashf al-Mahjūb*, ed. V.Zukovsky, Tehran: Amīr-e Kabīr, 1957, p.464. 英訳：R.A.Nicholson, *The Kashf al-Mahjūb*, London: Gibb Memorial Trust, 1936, p.356.
- 10) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第1巻、p.164 (第13夜)。 *Alf Layla wa Layla*, Vol.1, p.37.
- 11) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第1巻、p.241 (第18夜)。 *Alf Layla wa Layla*, Vol.1, p.48.
- 12) *Alf Layla wa Layla*, Vol.2, p.413. 池田修訳『アラビアン・ナイト』第17巻、1991年、p.27 (第867夜)。
- 13) 冒頭は「聴け、葦笛がいかにかに語りいかにかに別離を訴えるか。私が葦原から切り離されて以来、わが嘆きの声にも男も女も悲しんだ」という詩句で始まる。『精神的マスナヴィー』全体が、葦笛が語る「神秘の言葉」という設定になっている。
- 14) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第11巻、1980年、p.45 (第469夜)、p.53 (第471夜)。 *Alf Layla wa Layla*, Vol.1, pp.643, 645.
- 15) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第11巻、p.25 (第466夜)、p.96 (第479夜)。 *Alf Layla wa Layla*, Vol.1, pp.640, 653.
- 16) 北原白秋「鳴りひびく沈黙の聲音」＝『邪宗門』「柑子」第5連。『白秋全集』第1巻 (詩集1)、岩波書店、1984年 p.205。 山川登美子「桜ちる音と胸うつ血の脈と似けれそぞろに涙わく日」＝坂本政親編『山川登美子全集』光彩社、1972年。吉野鉦二「今入りてゆきたる蝶は鳴かざらむ雑木林の奥よりのこゑ」＝『時間空間』白玉書房、1972年。大岡信『第八 折々のうた』岩波書店、1990年、p.29。

\*本稿には一部、筆者の旧稿「聴乎無聲—オマル・ハイヤームと〈神秘の言葉〉」『UP』240号、東京大学出版会、1992年10月、pp.27-32と重なる箇所がある。